

<講演抄録>5. 本学補綴科における来院患者の動態調査(第21回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題) : 全部症義歯, 顎関節症, 顎補綴患者について

著者	須藤 仲毅, 菊池 雅彦, 玉澤 佳純, 服部 佳功, 奥川 博司, 鈴木 健也, 川田 哲男, 山口 由紀子, 渡辺 誠, 木村 幸平, 鹿沼 晶夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	11
号	2
ページ	96-96
発行年	1992-12-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/31435

性領域が1.1 V程度まで延びており、この合金の耐食性は純Tiに近いことがわかった。

以上より、Ti-50 mol% Pd合金のPdをAuとCrで置換すると、変態温度の低下と耐食性の向上を得ることができた。この合金の組成を検討すれば生体温度付近で形状記憶効果を示す高耐食性合金になると思われる。

5. 本学補綴科における来院患者の動態調査 — 全部症義歯、顎関節症、顎補綴患者について —

須藤仲毅, 菊池雅彦, 玉澤佳純, 服部佳功, 奥川博司, 鈴木健也, 川田哲男, Daet. D.G., 山口由紀子, 渡辺 誠 (高齢者歯科), 木村幸平 (歯科補綴1), 鹿沼晶夫 (歯科補綴2)

わが国の高齢化社会への移行は、歯科疾患を有する患者群の動態に影響を及ぼすことが予想される。そこで、昭和62年から平成3年までの5年間に本学補綴科外来に来院した新患5,249名と、これらのうち補綴科で治療を行うことになった受け入れ患者2,920名を対象にその動態調査を行った。調査は、患者の年齢、居住地域(仙台市、仙台市を除く県内、県外)の2項目である。補綴科受け入れ患者については、これらを顎関節症、全部症義歯、顎補綴、その他の一般症例の四症例別に調査した。さらに、この結果と国勢調査における人口動態統計と比較して以下の知見を得た。

補綴科受け入れ患者数は増加していたが、診療設備、および歯科医師数の制約のため、新患のおよそ6割のみが受け入れ患者であった。顎関節症の患者は、仙台市、県内、県外のいずれの地域でも著しい増加を示していた。県内および県外では仙台市に比べて一般症例の割合が低く、顎関節症、顎補綴が高い割合を示していた。これらのことから、本学補綴科が、仙台市における地域病院としての機能を果たす一方で、県内ないし東北地方の基幹病院としての役割を果たしていることが示唆された。一方、年齢に関する調査から、各々の症例は極めて特徴的は年齢構成を示し、一般症例50歳代、顎関節症20歳代、全部症義歯70歳代以上、顎補綴60歳代にピークを有していた。また、顎関節症は、低年齢から高齢まで広く発症することが明らかになった。これらの調査結果および人口動態統計から、顎関節症患者や高齢者患者の増加にともない、今後、補綴科新患数の増加が予測された。

6. 骨塩量計測の矯正学的意義について

阿部まちよ, 佐藤亨至, 三谷英夫 (歯科矯正)

歯科矯正学臨床において、個々の患者の成長発育段階を知ることは、治療の時期や方法を決定するうえで重要である。我々は、骨粗鬆症の診断等に整形外科分野において用いられている骨塩量が、小児においては骨成長段階を知る指標になりうるのではないかと考え、骨塩量計測とその矯正学的意義について考察した。

計測は、7・8歳の女子44名、および13歳の女子42名を無作為に選択し、第2中手骨の骨濃度をアルミニウムを標準物質として換算するMicrodensitometry (MD法)を改良し、コンピュータと組み合わせて自動計測する装置TEH-40 (帝人株式会社製)を用いて行った。本装置は、精度の向上と計測時間の短縮を計ることを目的として考案された卓上型の骨塩定量検査装置で、診療室等でも計測が可能である。計測項目として、 $\Sigma GS/D$ (単位骨幅あたりの骨塩量)とMCI (骨幅に占める皮質骨幅の割合)を選択した。

その結果、心疾患、内分泌疾患、骨系統疾患の既往のある患者においては $\Sigma GS/D$ およびMCIの値の低下が認められ、本手法はこれらの疾患のスクリーニングになると考えられた。また、 $\Sigma GS/D$ は、7・8歳群において身長および下顎骨長と、13歳群において骨年齢(TW2法)と危険率1%で有意な相関が認められた。このことから、思春期前期、および思春期性成長ピークを越えた時期において、本指標は個体の骨成長と密接な関連を有していると考えられ、全身成長段階を評価する指標の一つになると考えられた。

以上のことから、骨塩量計測は、歯科矯正学における診断や治療の際に有用な情報を与えるものと考えられた。

7. 歯肉付模型を用いた支台歯形成実習の多変量解析による分析 — 各測定項目間の相関性について —

小野恭裕, 笠原 紳, 遠藤弥生, 石橋 実, 木村幸平 (歯科補綴1)

これまで当教室では、全部鑄造冠の支台歯形成に関して、支台形態ならびに歯肉や隣在歯の損傷などの8判定項目・41測定部位を設定し、支台歯形成の良否について検討を加え、日本補綴歯科学会雑誌第18巻1号および第35巻1号に報告した。

さらに、項目全体の関連性の検索を目的として、支台歯形成実習の結果を対象に多変量解析による検討を